

令和六年度 特色 入試 問題

《総合人間学部》

文系総合問題

一〇〇点満点

(注意)

- 一、問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
- 二、問題冊子は表紙のほかに6ページ、解答冊子は表紙のほかに8ページある。
なお、別に下書き用紙8枚を配布する。
- 三、問題は一題(二問)である(1ページから6ページ)。
- 四、試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、
これら以外のことを書いてはならない。
- 五、解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
- 六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
- 七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。
- 八、問題冊子、下書き用紙は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

以下の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

プライバシーの意識が広がったのは、それほど古いことではない。フランスの歴史家フィリップ・アリエスは『子供』の誕生』で、「十八世紀以後、家族は社会との間に距離をもち始め」「個人生活」の枠が拡大し、「家の構造も、世間に対する『防衛』という新たな配慮に応じるのである」と述べている。そして、個室が出現し、プライバシーや孤立が生じたのだと説明している。個人と公共の概念が広がり、また近代の室内が出現したということだ。個室とプライバシーの概念は、一九世紀になると、大衆にも広がっていったと、ミシェル・フーコーは『性の歴史』の中で述べている。

成人と子供の分離、両親の寝室と子供たちの寝室を二つの極に分ける仕組み（それは、十九世紀の間に、大衆的住居が大々的に建てられるようになる、一つの鉄則にまでなった）、男の子と女の子の相対的な隔離、乳児に対して与えられるべき処置に関する厳密な指示（母親による授乳、衛生）。

プライバシーの厳守と尊重という考え方とともに、近代社会では、

ものを消費する「大衆」が出現し、やがて大衆がある程度、財産を私有するようになる。そして、私有したものを守るために錠や鍵が大衆の生活の中へと広がっていく。そうしたことにしたがって、機能的かつ量産可能な近代的な錠と鍵が発達する。錠と鍵の存在は、プライバシーの概念と深く結びついている。

あらゆるものが、共有されているような集団の中では、自分のものと他者のものを切り分ける必然性はない。自分の所有物に他人から手を付けられたという感覚は存在しない。したがって、錠と鍵の存在は、私有（所有）概念と深く関わっている。

自分のものと他人のものとの区分が意識されれば、そこにはおのずと自他を切り分ける「しきり」概念が生まれる。錠は、その「しきり」の象徴的装置である。

わたしたちは、さまざまな方法で生活の中にしきりをつくってきた。その中でも「わたし」と他人とのしきりは、多様な方法で行われている。家族の中でも、それぞれが自分の衣服を持ち、個室を持つといったことによつて、家族の中にしきりをつくっている。

そして、家族とも共有しない「わたしのもの」は、わたしたちの存在そのものに深くかかわっている。「錠と鍵」に象徴される侵入の

遮断装置は、単に、物質としての財産を保護する装置としてあるのではなく、わたしたちの存在への侵略あるいは侵入への防御としてあるように思える。

現在では、鍵（キー）のイメージは、コンピュータ・ネットワークにおける「パスワード」を想起させる。そして、パスワードは、個人の証明（ID）になっている。

「わたしのもの」という所有感覚が、どれほど自身の存在にかかわっているかを見ておこう。つまり、「わたしのもの」が自己の表象となりうるのかどうかということである。

ここでは、「防御」ということを、セキュリティや装置やシステムとしてではなく、防御することの前提となる自己存在について、「もの」をめぐって考えてみたい。

セキュリティが議論されるとき、多くの場合、セキュリティの装置としての監視システムや防御のシステムそのものが議論されるが、防御されるべき「自己」、とりわけ「自己の所有物」については議論されることはほとんどないように思える。

その対象が個人ではなく、国家の問題へと広がった場合、「所有」概念は、一気に政治問題となる。たとえば「竹島」や「尖閣諸島」などをめぐる「所有」問題を想起すればいい。

ただし、領有権への意識は、領土を確定し線を引いた近代国家のあり方から出ている。近代以前では、日本をふくめアジアの海の領

域は、それぞれが自由に共有していたようである。そのことは、たとえば網野善彦の一連の日本の歴史の読みなおしの中にも見られる。

(中略)

わたしのもの

ところで、わたしたちは、自分が生活している世界を言葉によって組織しているだけではなく、どうやら、自分の持ち物によって組織しているところがある。たとえば、わたしたちは自分のものによって囲まれていることで、どこか安心感を持つ。ものに対するこうした感覚は、おそらくとてもプリミティブなもののように思える。

たとえば、旅行に行くときに、いつも使っている枕やタオルを持っていないと不安になるという小さな子どもは少なくない。もちろん、枕やタオルばかりではなく、人形やそのほかの玩具という場合もある。おそらく、そうしたものは、子どものテリトリーを組織しているものなのだろう。それがあつ場所は、「わたしの場所」であり「わたしのもの」なのである。子どもばかりではない。旅行するとき、洗面具や着替えなどさまざまな荷物を入れたバッグやケースは、自分のテリトリーを組織するものになる。だから、空港でスーツケースが消えてしまうと、なんとも寄る辺ない不安な気分になるのは、自分の生活世界を組織しているものが消えたということによ

っている。

ほかの例だが、ホームレスの生活を見ると、わたしたちには、考えられないほど多くの古新聞や段ボールを集めて、身の周りに置いている。また、ブルーシートや段ボールによるハット（小屋）の周辺に、さまざまなものを寄せ集めていたりもする。そうしたものによって、やはり自分の周りを取り囲む世界を組織しているのである。

言葉によって、「わたし」の世界を組織し、外界との境界をしきっているように、わたしたちは、ものによっても同様のことを行っている。だから、プリミティブな思考や感覚の中では、言葉がものや現実と不可分であるように、ものは持ち主と不可分であるように思えるのである。形見分けというのは、ものそのものではなく、それを所有していた（それによって自分の世界を組織していた）人の一部を引き継ぐことを意味している。かつて、家を引き継ぐというのは、単に住宅やその中に置かれた家財を相続するというだけでなく、「いえ」を引き継ぐことを意味していた。

そのように考えると、わたしたちが抱えているものへの欲望は、単純な物質への欲望にかぎられているのではなく、自らの世界を組織する言葉への欲望と相同的なものがあるように思える。「わたしのもの」を持つことへの欲望は、わたしを組織することにかかわっているからこそ、それを消すことが困難なのかもしれない。それを消

すことの苦痛は、わたしたちが言葉によって自分の周りに組織した世界を、失うことへの苦痛と似ている。

たとえば、一九九〇年代半ばに大きな社会問題となった「オウム真理教」では、私有物を「お布施」として供出させ、子どもすらも私有させないために親から引き離していた。このように、通常の「わたしのもの」感覚を徹底的に崩壊させてしまうことで、個人や主体の意識や感覚を壊滅させ、奇妙な共同体を受け入れさせていたのかもしれない。

ほかの例だが、一般的に、住まいを新たにできると、家具や日用品をすべて新しいものにしたくなる。若い人は、新しいものの環境に比較的是やく馴染むのだが、高齢者は、なかなか馴染むことがむづかしい。したがって、高齢者が住まいとともに、家具や日用品すべてを新たにできると、かつて自分が組織していたものにまつわる記憶がしだいに失われ、精神的にはあまりよくないといわれている。同じことだが、高齢者が養護施設などに入る場合、わずかな私物しか持ち込むことができないことが多く、その結果、私物にまつわる記憶が希薄になるのではないかと思える。

「わたしのもの」というしきりが、わたしと他者との差異や境界あるいは壁をプリミティブなたちで認識させているのである。これは、近代的な主体概念やプライバシー概念よりもずっと手前にある素朴な感覚のように思える。

わたしたちが、集めた（所有した）ものは、自身で廃棄しないかぎり、自ら失うということはない。あり得るのは、外部からの侵入によってだろう。外部からの侵入は、人間の場合も、雨風などの自然の場合もある。外部にむかつて、侵入を防御することは、つまり、「わたしのもの」を持ち出されたり、破壊されたりすることが、単に物質を失うこと以上のことになる。あえて言うなら、それはわたし自身が侵略されるに似た喪失感を味わうことになる。二〇一一年三月一日の東日本の地震と津波で家とすべての持ち物を失った人々の喪失感は、想像をはるかに超えたものだ。

「わたしのもの」への他者の侵入を防御するもつとも簡易な「鍵」も、「わたし」にかかわるメンタルな意味を内包している。

ところで、家具や食器そしてさまざまな日用品などを、わたしたちは集め（所有し）、通常はそれらを室内に詰め込んでいる。室内は、「わたしのもの」を収蔵しておく空間でもある。

室内Ⅱ内面を表象するコラージュ

わたしたちの住まい、そして室内は、わたしたち自身が集めたものによって埋められている。家具、食器、衣服、書物、そのときどきに好ましく感じて買ったものや必要にせまられ購入した道具など、数多くのもの。それらのものは、そこに生活している人物を表象しているといえる。ものは、それを所有している人間の換喩

（メトニミー）^(注1) になっていると言っている。つまり、所有者の存在の「部分」になっているのである。

すでにふれたように「形見」は、それを持っていた人の一部であるように感じる。亡くなった父や母の残された衣服に、幼い子どもが、父や母の匂いがするということが少なくない。衣服というものに、父や母の痕跡を感じ取っているからなのだろう。

ものは、それを所有する人の換喩となつているとすれば、それらが集められた室内は、そうしたものが集積された固有の空間だといえる。家具、食器、衣服、書物そしてこまごまとした雑貨。それは、一日で室内に集まったわけではない。ある程度の時間をかけて、しだいに集められたものだ。そして、それらは、ほとんどの場合、自分でつくったものではなく、既存のものであり、それを購入することで集められたのだろう。ものは集められ、たとえそれが混乱しているにしても、室内のあるべき場所に置かれる。そうした意味では、室内はそこに生活する人の生み出したコラージュだといえる。だから室内（インテリア）は、そこに生活する人の精神や内面を表象しているのだ。

室内が個人の内面や精神の姿を映し出しているのは、それがものによるコラージュ空間だからだろう。

ところで、精神医療の場では、患者の内面を読むということ、フロイト以来、「夢の解釈」が行われてきたことは知られるとおりだ。

また精神医療では、患者に「箱庭」やカラージュを制作させて、そこから精神の状態を解読しようとするが行われてきたようだ。

精神科医の中井久夫は、よく知られている「ロールシャッハ」について、「すでに存在する曖昧図形や染みや無意味な線を手がかりにして有意味な視覚映像を捉える方法」なのであるといい、それを「投影法」と呼んでいる。つまり、無意味な図形から有意味な図像を捉える精神の「投影」的なあり方をそこから読む方法である。それに対して、「箱庭」や「カラージュ」を「構成法」と呼んでいる。患者が素材を使って構成していくからだ。また、中井は、夢とカラージュの類似性について、次のように述べている。

「夢の素材は、通常、われわれが知っているものからできている。ロールシャッハのような不定形の染みや幾何学図形は夢にはふつう登場しない」

つまり、夢もカラージュもすでによく知ったものによって構成されている。他方、夢とカラージュの違いもある。「夢の場合には、意志は稀にしか働かない。そもそも何を夢に見たいと思ってもそのものを見る自由はない。危険から逃れる場合に働く意志も、それ自体が夢の一部に過ぎない。これに対してカラージュは、白昼の意志的行為であるから、この受動性はない。むしろ、大いに能動的である」と中井は述べている。そして、カラージュは既存のものに「新しい意味を与えるような切り出し方をして、まったく別個の関連の中に

置く」のだという。

室内に置かれたさまざまなものもまた、能動的に、既存の場所（一般的には商業施設）から買い取られ（切り抜かれ）「能動的に」自分の室内に構成されることになる。室内は通常のカラージュと異なつてゆつくりと時間をかけて構成されているにしても、さまざまなものがカラージュされた空間なのである。したがって、まさにインテリア（内面、精神）の表象としてある。

さまざまなものが集められた室内は、「夢みる空間」であるということ、ベンヤミンは指摘している。「事務所内では現実的なことがらしか考慮しない私人は、彼の室内においてさまざまな幻想を抱き続けることを求める」。室内は、個人の夢の空間なのである。だからこそ、そこに個人の精神のあり方が投影されるのだ。

また、だからこそ、わたしたちは自己の内面にかかわる室内に、他者が侵入することへの恐れや、不快感を持つ。日常的な気持ちとしてあるのは、「わたしのもの」そしてそれが集められ構成された「室内」への他者の侵入が、わたしの内面そのものへの侵入と感ずる。だからこそ、「室内」への侵入に対する防御のシステムは、わたしたちの存在の深い部分にかかわっているのである。それは、日常、ほとんど意識されないのではあるが。

出典 柏木博 『わたし』と『わたし』を隔てるもの『わたしの家』

— 痕跡としての住まい』(亜紀書房、二〇一三年) 所収。

(注1) メトニミーとは、ある事物を表すのに、それと深い関係のある事物で置き換える方法をさす。

問一 筆者は、「わたしのもの」と「私有(所有)物」が、どのような関係にあると述べているか、また、ここから現代の社会に対してどのような問題提起をすることが可能だと思うか、一二〇〇字程度(句読点を含む)で述べなさい。(五〇点)

問二 個人の内面や精神が映し出された「コラージュ空間」の具体的な事例をあげて描写し、そこではどのようにして「わたし」が組織されているかを、一二〇〇字程度(句読点を含む)で説明しなさい。(五〇点)